

# 関西電新聞

関西電力グループ  
power with heart

2025  
No.1084

## 阪神・淡路大震災から30年

### あの日から受け継がれる想いと使命感

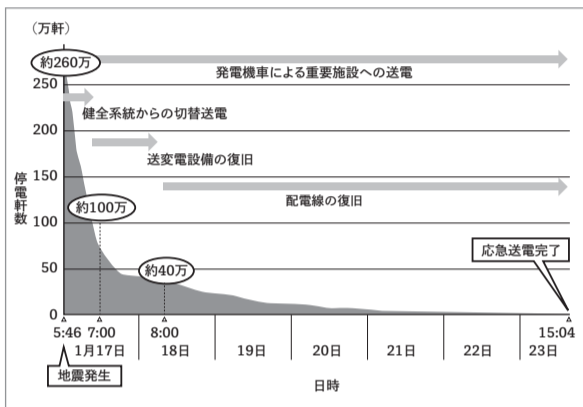
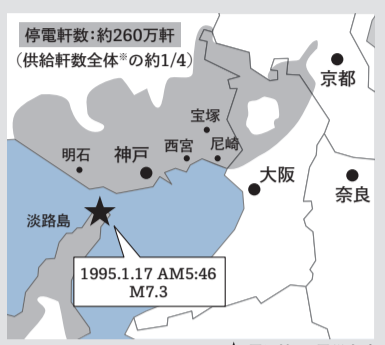
2025年1月17日、阪神・淡路大震災から30年を迎えた。未曾有の震災であったが、一刻も早くお客さまに電気を届けようとするため、多くの従業員が、それぞれの立場で強い使命感を持ち、昼夜を問わず復旧にあたった。その使命感は、30年経った現在も、世代を超えて受け継がれ、昨年1月に発生した能登半島地震での応援派遣をはじめ、多くの現場で着実に発揮されている。今回、震災当時の対応を経験した従業員に、当時の様子を振り返ってもらい、それぞれの想いを語ってもらった。

### 当時の被害状況と復旧にかかる使命感

1995年1月17日午前5時46分、マグニチュード7.3の地震が発生し、約260万軒が停電した。この未曾有の震災の中、一刻も早く電気を届けようと、他電力会社や協力会社から物心両面にわたり多くの支援を受けたが、昼夜問わず一丸となって復旧作業を進めた。結果、震災発生から7日間で、応急送電を完了することができた。電気がついたときには、お客さまから拍手と感謝の言葉をもらい、ライフラインを担う企業として、電気の重要性や責任の重さを痛感した出来事であった。電力の安全・安定供給に向けて、課せられた使命の重大さを肝に銘じ、当時発揮された「強い使命感」を、今後もしっかりと継承していく。

#### ■阪神・淡路大震災の概要

日時：1995年1月17日午前5時46分  
震源地：淡路島北部[北緯34度36分、東経135度02分]  
深さ：16km  
規模：マグニチュード7.3  
震度：[震度7]神戸、芦屋、西宮、宝塚の一部、淡路島東部の一部(北淡町、一宮町、津名町)  
[震度6]神戸、洲本  
[震度5]豊岡、京都、彦根  
[震度4]大阪、奈良、和歌山、福井、岡山、鳥取、高知、高松、徳島等  
死者数：6,434名  
負傷者数：43,792名  
住家被害：[全壊]104,906棟 [半壊]144,274棟 [一部損壊]390,506棟



■ 停電の復旧状況



#### 発生当時の電力需給状況

総需要：1,270万kW→940万kWに低下  
周波数：定格60Hz→60.45Hzに上昇  
発電支障：火力発電所35基のうち12基(176万kW)が自動停止

#### 設備被害数(全設備数)

火力発電所：10箇所(21)  
変電所：50箇所(861)  
架空送電線：23線路(1,065)  
地中送電線：102線路(1,217)  
配電線：660回線(13,355)  
被害総額：約2,300億円




■ 当社への影響

【関西電力送配電】  
阪神・淡路大震災から30年  
を特集したWEB動画を  
YouTubeで公開中!



こちらからご覧ください。

## あの日の使命感 ～受け継ぎたい想い～



関西電力送配電 配電部 配電研修センター  
お客さま技術研修講師 森田 潤一さん


震災当時の所属：兵庫営業所 お客さまセンター

### ■ 震災当時、どのような使命感を持って復旧対応にあっていたか。

当時、私は営業所に配属されて4年が経ち、台風等による復旧作業は既に経験していました。しかし、当時の震災は、炎に包まれる街、建物の倒壊により至る所で折れ曲がったり傾いたりする電柱、垂れ下がった高低圧電線、電柱の上で宙づりになった変圧器等、まるで戦争でもあったかのような、誰もが経験したことが無い現場でした。余震の恐怖と戦いながら、安全を最優先に「少しでも早く電気を届けたい」という気持ちで、必死に復旧作業を続けました。そんな状況の中でも、あるマンションの送電が完了して電気がつくと、多くの住戸の中から拍手が沸きあがり、バルコニーから手を振りながら「ありがとう」と言ってもらった光景は、今でも覚えています。

### ■ 復旧対応の経験を経て、後輩に伝えたいこと、受け継ぎたいこと。

震災の現場は、通常のやり方では復旧できないことや、危険な作業環境ゆえに自分自身で判断して復旧する状況が多くなります。現在、配電研修センターで講師をしています。受講生には、使用する測定器を選定する際にも、事象から考えて自ら選定してもらったり、決められた手順で作業を実施する理由を学んでもらったりする等、日頃の作業でも考えて判断できるように、現場力の向上につながる研修を行っています。震災発生から7日間で応急送電が完了しましたが、それは復旧作業に携わった方々の力だけでなく、お客さま対応や「衣・食・住」を支えて下さった方々のご支援もあったからです。有事の際には、ライフラインを守る誇りと使命を忘れず、一体となって頑張りましょう!



関西電力ソリューション本部 営業部門 法人営業第一部  
法人営業グループ(公共)リーダー 藤本 学良さん

震災当時の所属：三宮営業所 お客さまセンター

### ■ 震災当時、どのような使命感を持って復旧対応にあっていたか。

当時、私は低圧工事の運行管理業務に従事していましたが、震災当日、入社後、まず実施したのは、神戸関電ビル屋内通路の瓦礫を片付けて、執務室に入れるようにすることでした。その後は、事業所の勤務歴が長かったこともあり、当時では希少だった社有バイクを使用して、他電力の応援部隊や地域外の協力会社の方々に復旧現場に案内すべく、先導を行いました。「1分でも早く、1件でも多く復旧が進むように」という思いから、復旧作業の合間に次の現場に先回りして状況を確認したり、先導を終えた後は事業所に戻り、次の日に先導する現場の順番を整理したりする等、少しでもスムーズに現場に先導できるように努めました。寒さがこたえる中、至る所で渋滞があり、非常にづらい作業でしたが、震災がなければ一緒に働くことになかった方々とともに、電気がついた瞬間にお客さまと一緒に喜び合えたことは、今でも忘れられません。日々、復旧作業が完了することとその喜びが広がっていくことに、当社事業の強い使命感と大きな責任を痛感しました。

### ■ 復旧対応の経験を経て、後輩に伝えたいこと、受け継ぎたいこと。

昔の方は「芸は身を助ける」とおっしゃったそうですが、普段の業務で得た知識や経験は、震災のような一大事においても、何かの拍子に役に立つものです。仕事に限らず、家庭も趣味も真摯に、できる限り楽しむことで、一生のうちには「良かった」と思える瞬間がきっと来ると思います。

### 新年特別企画 森社長 & 従業員座談会

## 私たちの使命を果たし続けるために ～未曾有の災害に備えて～



「あたりまえ」を“守る”  
なかでも、“創る”こと  
にも積極的に！

関西電力 社長  
森 望

2025年1月17日で阪神・淡路大震災から30年を迎えました。昨年は1月に能登半島地震、8月には南海トラフ地震臨時情報が発表される等、災害に対して意識が高まる1年となりました。エネルギーの安全・安定供給およびライフラインを支えるべく、各所で尽力する従業員に昨年の振り返りと防災に向けた取り組み内容やその想いについて語り合っていました。



### TALK THEME トークテーマ

- 昨年を振り返ってどう感じた？
- 災害発生時におけるインフラの確保、あるいは速やかな復旧に向けて取り組んでいることは？
- インフラの担い手として、未曾有の災害に備えて従業員一人ひとりが意識すること、できることは？
- 「あたりまえ」を“守る”取り組みの中でも、“創る”を実践していることは？

#### 昨年を振り返ってどう感じた？

**松尾さん** 私は昨年、1月3日から能登半島地震の復旧作業へ向かいましたが、現地が停電しているニュースを見て、早く電気を届けたいという強い思いが沸き起こり、自分の中の使命感が呼び起こされる感覚がありました。過去には熊本地震を経験し、今回の能登半島地震の復旧では、その経験を活かすことができました。今回一緒に復旧作業にあたった作業員も含め、能登での経験を活かして、南海トラフ地震等の次の災害に備えて準備していきたいなと思いました。

**森社長** 1日に地震が起こって、皆さんは3日に復旧に向かわれましたが、すぐに連絡を取り合って体制の準備を整えたのですか？



関西電力送配電 大阪北本部  
松尾 尚人さん

#### 災害発生時におけるインフラの確保、あるいは速やかな復旧に向けて取り組んでいることは？ インフラの担い手として、未曾有の災害に備えて従業員一人ひとりが意識すること、できることは？

**炭崎さん** 私の勤務する御坊発電所は人工島にある発電所のため、南海トラフ地震が発生すると橋が通行できなくなり、孤立する可能性があります。また、津波によっては、約25分で事務所の3階まで浸水すると想定されていますので、インフラの確保や復旧よりもまずは発電所員の人命を最優先に考え、緊急避難を行う必要があります。そのため、高さ約30mのタービン建屋の屋上を避難場所に設定し、周辺には非常用の資機材や発電機等を備え付けています。また、災害時には、いかにスピード感をもって確実に動けるかという点が重要です。そのため、地震や津波が発生すればどう行動するのか等、様々なケースを想定した上で対応策を整理することが必要です。あわせて、定期的な訓練を通じて意識を定着させるために、毎年、消防署や海上保安庁と協力して、海と陸で同時に災害が発生することを想定した訓練を実施し、所員の意識を高めることを目指しています。



関西電力 火力事業本部  
炭崎 公平さん

他にも、非常時に本店との情報連携がスムーズにいかない課題があったため、火力事業本部内でZoom Roomsというシステムを各発電所に導入し、有事の際にリアルタイムに現場の状況が映像で共有できるように、連絡手段を改善しました。これにより、要員を割くことなく、スムーズに本店との情報連携が図れるようになりました。

**松岡さん** 和歌山本部では、非常災害時の対応について机上検討を中心に実施してきましたが、今年はその実効性をより高めるため、実動訓練を行いたいと考えています。具体的には、自治体や地元の商業施設にも協力いただきつつ、協定を結んでいるオープンスペースの場所を借りて、食糧の輸送や、電力所と配電営業所で現場の情報連携をする等、実際の状況を想定した対応を行う予定です。また、

**松尾さん** そうですね。地震が発生した次の日に応援要請がありまして、復旧対応できる者を集約し、体制を整えました。現地では、まず北陸電力の拠点に集まり、指示を受けて避難所に電気を届けました。避難所の方から「ありがと」とお礼の言葉をいただき、すごくやりがいを感じましたし、嬉しかったです。ただ、報道されている以上に被災地の状況が酷く、周りの家も大半が倒壊して、海沿いの道はほとんど通れない状態でした。実際に現場に行くと思うことはたくさんありましたが、そこは気持ちを切り替えて復旧作業を進めました。

**森社長** そうでしたか。私も、関西から北陸に復旧作業に向かってもらうことが決まり、出発の知らせを聞いた時は、「速やかに対応してくれてありがと」という感謝の気持ちと「誰一人怪我することなく、無事に帰ってきてほしい」という強い願いで、胸がいっぱいになったことを覚えています。

南海トラフ地震の被害想定を踏まえた早期送電方法の検討も進めており、検討結果に基づき、送電鉄塔にバイパス線を接続する等の訓練を実施して、現実的な対応となるように復旧方針を変えていく予定です。他にも、能登半島地震の際には通信が途絶し、情報連携がうまくできなかったようなので、和歌山の全事業所にスターリンクというデータ通信を可能にする可搬式の衛星通信機器の導入を考えています。スターリンクは、ホットプレート程度の小型の機器なので、電力所のような拠点での活用だけでなく、平時の無線不通エリアでの活用や非常災害時の復旧拠点での活用も可能であり、管内の応援時のみならず、他電力への応援も含めて情報連携の強化が期待でき、他地点での配備も検討していくのが良いと思います。

**森社長** 応急的な復旧と、時間をかけてやっていく復旧とがありますね。時間軸等の前提をどう考えるかによって、様々なバリエーションがあるので、それぞれに備えていかないとはいけません。その中で順番に想定を重ね、確認することは相当な労力と知恵がいると思うんですよね。当社グループだけではなく、自治体や地元企業の皆さんを巻き込んでやっていかないとはいけませんので、ぜひやってみてください。

**中田さん** 世間一般に見ても、防災意識が高まっているのを実感しています。自衛隊主催の防災イベント等に出展することがあり、来場された方に「防災ハンドブック」を配るのですが、能登半島地震以降、来場された方の反応がこれまでと違い、用意していたものがすぐなくなるんです。総務室防災グループとしては、このような、一般のお客さまに対する啓発活動も行っていますが、社内ですら、災害への備えを



関西電力送配電 和歌山本部  
松岡 宏樹さん

検討する防災部会の事務局もしています。今年度は2回、7月と10月にそれぞれ大規模地震を想定したパース訓練と全社防災訓練を実施しました。この座談会でも皆さんから様々なお話が出ていますが、平時にできることは、訓練がやっぱり一番かなと思っています。災害に対して、いかにして備えるかを考え、その中で出てきた課題をどうやって解決するのか、この活動に終わりはないと思っています。ライフラインを守り続けることが会社の要だと思っますので、訓練を繰り返し、「終わらなさい聞いていく」という強い思いで日々業務に励んでいます。

**森社長** 訓練のシナリオを、もっと複雑にして「本当はどうすんねん」と考えてしまうような、シナリオなき訓練になっても良いと私は思います。ぜひ、大胆にやっていただきたいと思います。

**高橋さん** 会社によってBCP(事業継続計画)の考え方がだいぶ違うなと思いました。私はキャリア採用入社して、東日本大震災の時は、前職のメーカーに勤務していましたが、東北の方たちの置かれている状況に心を痛めながらも、経済も回していかなければならないということにジレンマを抱えながら仕事していた記憶があります。関西電力に入社して、「あたりまえ」を支えるということは従業員一人ひとり、皆さんの努力のおかげなんだな「世の中に貢献する」というのはこういうことなんだなということ



関西電力 総務室  
中田 雅博さん

#### 「あたりまえ」を“守る”取り組みの中でも、“創る”を実践していることは？

**川村さん** 先ほど松尾さんの話にあったような、有事の際の相互応援の枠組みが、通信会社ではまだ無いんです。そこで近畿圏以外の日本各地の通信会社や、施工会社の協力を得て、応援リソースの派遣・受入れの仕組み作りに取り組み始めました。目下はPNと呼ばれる電力系の通信会社にて、全国で協力体制を築き上げることに励んでいます。

また、2018年の大阪府北部地震で大規模災害を受けた時、情報が一度に集まりすぎて捌ききれない事象が起きたので、ここ数年で大規模災害に備えたシステム構築に取り組んでいます。何かしらの障害が発生し、通信回線が複数落ちた際に、一元的に統制するようなシステムを構築するのはもちろんのこと、大規模災害時だけでなく、日頃の障害であっても使えるようにカスタマイズして、非常時にも通常の業務通りに使えることを目標に置いています。また、今後はAI等を活用して、これまで人間が処理していた部分を、AIが自動的にソリューションしていくようなことにも取り組んでいきます。

**森社長** 電力の場合はエリアがある程度決まっているけれど、通信会社の場合は少し混在してますね。全国展開している通信会社と、我々のように、あるエリアをメインに展開している会社では、規模の大小や特徴の違いで、連携が難しい側面はあると思います。でもそれを進めることが、有事の際のお客さまのためになるので、ぜひ頑張ってほしいですね。

通信回線は複数のルートを確保・維持して、それを人間が切り替えていたら追いつかないけど、AIがうまく経路も内容もバランスをとるようなことができれば、そこがボトルネックになるとなく、スマートな情報連携が実現できるのかなと素人ながら思いました。

**田中さん** 私の業務では、地域のつながりを支えるコミュニティインフラや配送インフラを充実させることに取り組んでいます。スマートエコタウン星田では、関電不動産開発と連携しながら、戸建て区画の共用棟に太陽光発電設備とEVを設置しました。EVは、平時はカーシェアとして、非常時は蓄電池として使えるようにしています。また、住民参加型の防災イベントをサポートし、住民の皆様



関西電力 ソリューション本部  
田中 十和子さん

肌で感じました。私自身も、電気はあってあたりまえと思っていましたが、関西電力の一員となり、いざ反対の立場になると、「こんなに頑張ってくれている人がいるのに何でもっと皆わかってくれないのだろう」と思っています(笑)。

**森社長** そうですね。我々は社会を支える大変重要な責務を担っています。仕事内容や安全・安定供給にかける思い、加えて、エネルギーそのものについても理解いただくよう、我々も、正しく伝える努力をしていかなければいけないですね。わかっていただける、応援していただける人が増えると嬉しそうですね。



関西電力 調達本部  
高橋 紗樹子さん

**高橋さん** 反省として、普段から「現地・現物」と言いながら、振り返ると、防災対応で自身が「現地・現物」を意識した業務ができていなかったなと思いました。例えば、燃料仮貯蔵所用の資材を手配しているにもかかわらず、それが実際にどのように設置されて、どのように使われているか、また取引先さま側でどのように保管されているのか、実は知らなかったんです。イレギュラーな事態が起きた時に、先回りをして何をしなければいけないかイメージできるように現場を確認しておきたいと思います。

**森社長** ぜひ現場を見てください。震災や有事の対応で、シナリオ通りにいかない時に判断できるかどうかは、「現地・現物」を見て、知っているかどうかということに勝負がかかってくると思います。

さんにEVから蓄電池への切替えを実際に体験してもらおう等、非常時の対応方法を共有していく取組みはすごく大事だなと実感しています。お客さまからは、インフラ企業への期待とともに、プロとしての意見を求められていると感じています。他にも、警備員の方に週に3日、まちを巡回警備してもらい、お子さんが帰ってきたら「おかえり」と声をかけてもらったり、まち全体として安心・安全を担保しているような取組みを行い、住民の方から喜んでいただいています。

**森社長** スマートエコタウン星田ができて間もない頃に共用棟を見せてもらいましたが、まちとして拠点を作って、新しいまちってこういうものだろうなというのをすごく実感しました。関西電力グループが中心となって、根底からまち全体をつくり、日頃からのセキュリティも、いざというときの対応も安心してもらえるような先進的なまちづくりの形だと思えます。

**田中さん** はい、関西電力が今まで取り組んできたエネルギー分野に加え、その周辺の新しい分野にも挑戦することで関西電力グループらしい先進的なまちづくりが実現できると思っています。住民の利便性向上のため、地域の買い物支援する取組みも担当しているのですが、お客さまや地元店舗の従業員の方からの感謝の言葉が今が一番の励みです。

#### 森社長から最後に

今回「災害に備える」というテーマで皆さんに色々お話しいただき、私自身気づかされることも多くありました。地域とのつながりの中で、本当に大事なものの一つが、いざというときに災害対応がしっかりできる、皆さんの暮らしを支えることができることだと思えます。また、「あたりまえ」を守る「なか」においても、より良くしよう、もっと出来ることはないかと、「創る」ことにも積極的に取り組んでいただいており、大変心強く感じました。ぜひ皆さん、引き続きその思いを強く持ち、頑張ってくださいと思います。本日は本当にありがとうございました。



## TALK MEMBER

上段左から

関西電力 総務室 防災グループ  
中田 雅博

関西電力送配電 和歌山本部 統括グループ  
松岡 宏樹

関西電力 調達本部 流通一般機器調達グループ マネジャー  
高橋 紗樹子

関西電力 火力事業本部 御坊発電所 計画課 計画係長  
炭崎 公平

オプテージ ICT運用保全部 アクセス保全チーム  
川村 隆文

下段左から

関西電力 ソリューション本部 営業部門 コミュニティ事業第一グループ  
田中 十和子

関西電力 社長  
森 望

関西電力送配電 大阪北本部 大阪北配電エンジニアリングセンター 作業長  
松尾 尚人

